



序

編

幼児に漢字を教えるのはいけないことなのか

昭和四十二年の四月、大阪市を中心とする十いくつかの幼稚園によって始められた「石井方式による漢字教育」は、今では、数多くの幼稚園や保育園によって、約二万人に及ぶ園児に実施されています。

このことについて、「かな文字を学習させるのもまだ早い」という意見さえある幼稚園教育に、漢字を学習させるとは何事か。乱暴もはなはだしい。」という声が起こるだろうということは、当然、私の予期していたところでは、

果たせるかな。ある幼稚園の園長さんが、顔色を変えて、「私は、幼稚園で、かなを学習させるといふことにも反対意見をもっているものです。まして、漢字を幼児に学習させ

るなどということとは、とんでもない暴挙で、絶対に許せないことだと思えます。」と、私に食ってかかりました。「そうおっしゃるのは、まことにごもっともなことだと思えます。実は、私も先生と同じ意見で、今、多くの幼稚園が行なっているようなかな文字教育は早すぎる」という考え方をしています。それはさておき、まあ一つ、私にだまされたと思つて、二十分ほどでよろしい。園児を私に貸してください。私の『漢字教育』というものを、実際にお目にかけてみたいと思います。指導の実際をご覧いただいた上で、良い悪いのご意見をおっしゃっていただきたい、と思えます。」

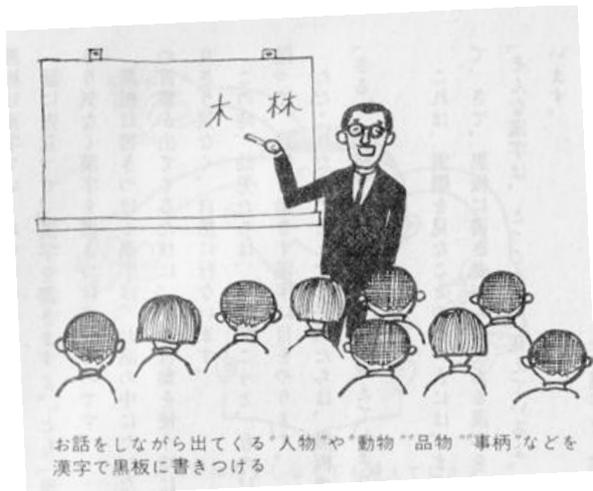
そこで、その幼稚園の園児たちを、四歳児と五歳児と合わせて四クラスほど、いっぺんに講堂に集めてもらい、『漢字教育』を始めました。

私の言う『漢字教育』とは、こういうことなのです。子供たちに向かって、「これから先生は、皆さんにおもしろいお話 をしてあげます。」と言つて、おとぎ話を始めます。

その時、お話をしながら、その話の中に出てくる、おもな『人物』や『動物』、『品物』、『事柄』などを、漢字で黒板に書きつけていきます。お話は、十分か十五分くらいで終わります。その間に黒板に書きつけられる漢字は、全部でおおよそ三十字くらい。それで黒板は漢字でいっぱいになります。

話に先立って、「漢字を書きますよ。」とも「漢字を教えます。」とも言いません。ただ話をしながら

石井方式 漢字の教え方



ら、さり気なく漢字を書きつけていくのです。

黒板に書きつける漢字は、お話の中にたびたび繰り返されて出てくる言葉を選びます。そして、その言葉が出てくるたびに、その言葉を使う時に、その言葉に当たる漢字を指さします。これも、やはりさり気なく、自然に行ないます。

この時、幼児たちは、話を聞こうと、私のほうに心も目も集中させていますので、私の手の動きに従って、自然と指さす漢字に目をやります。ただこれだけのことで、子供たちは、黒板の漢字を、話される言葉と結びつけ、「猿」という漢字は「さる」と読むのだと理解し、覚えてしまうのです。

これは、実際を見たことのない人には、まず信じていただけなことだと思えます。お話が終わって、さて、黒板に書き並べられてある漢字を、一字一字、子供たちに尋ねます。

すると、子供たちは、「そんな漢字は、とっくの昔に覚えているよ。」といわんばかりの顔をして、すらすらと読んでしまいます。

黒板いっぱい書きつけられた漢字を全部、間違いなく読みます。順序を変えて、どの漢字を指さしてみても、ためらわずに正しく読むのです。

念のために申し上げますが、私は、子供たちに、ただ、「お話をしてあげます。」と言ってお話をしたただけであって、決して、「漢字を教えてあげます。」とも、まして、「漢字を書くからこれを覚えなさい。」などとは絶対に言いませんでした。

ただお話をしながら、黒板に漢字を書きつけていただけで、いわゆる「漢字指導」というようなことは、



幼児は漢字指導をしなくても覚えてしまう

決していたしません。それにもかかわらず、黒板に書きつけられた漢字が、何と読む字であるかを、覚えてしまうのです。

この時も、園児たちは、どの漢字も元氣よくすらすらと読んでいきました。黒板にいっぱい書きつけられた漢字、三十字ほどもある漢字を、どれを指さしてみても、皆、少しのためらいもなく元氣に読みました。

私は、その間、時々園長さんの顔をうかがいました。すると、きらきらと輝く園長さんの目が、漢字をすらすらと読んでいく子供たちの姿に痛いほど強く注がれていて、息を殺し、身動きもしないでご覧になっている様子が、私の目に映りました。

さて、指導が終って、私が園長室の椅子に座った時、開口一番、園長さんの口をついて出てきた言葉は、「石井先生、私の幼稚園でも、この漢字教育をぜひやらせていただきませ。」という言葉でした。

その言葉や態度には、つい半ときほど前の、非難を露骨に表わしたそれとは違って変わって、心からこの教育を推進してみたいという、熱意と意欲とが満ちあふれていました。それから、「幼児の漢字を覚える能力が、こんなにすばらしいものであろうとは、今の今まで全く考えてもみませんでした。ほんとうに夢でも見るような気持ちです」園長さんはしみじみとした調子でそう語りました。

石井方式は『漢字で教える教育』である

そこで、私は、次のようなお話をいたしました。「石井方式による、『漢字教育』とは、『漢字を教える教育』ではありません。『漢字で教える教育』なのです。たった今ご覧になったように、お話の中に出てくる言葉を、ただ漢字で書いて見せるだけの教育です。漢



字を教えよう。漢字を覚えさせよう。などと思わずに、ただ漢字を見せるだけでよいのです。だから、漢字について、何の説明をする必要ありません。したがって、漢字指導などと、特別に取り立てて準備することは、何もありません。石井方式・漢字教育」という名前は、石井方式を知らない人が勝手にそう呼んだもので、ほんとうは、漢字教育」というほどのものではありません。ただ、今では、

ともあれ、石井方式・漢字教育」は、ただ漢字を見せるだけの教育であって、漢字を教える教育ではありませんから、指導のために、何の知識も技術もいりません。どなたでも、

やろうとさえ思えば、今すぐにもできるものなのです。」

子供たちは、話を聞きながら、漢字をただ見ているだけで、いつとはなしにそれを記憶にとどめていくのです。この漢字はなんと読む漢字と教えられたわけでもないのに、あの漢字はこう読む漢字などと、話を聞きながらひとりて理解し、記憶してしまうのです。幼児は、出会うものは何でも、皆覚えすにはいられない、……そう言いたいほど、強烈な記憶力をもっているのです。幼児期の幼児というものは、すべて、そういうすばらしい能力をもっているのです。

だから、幼児たちは、努力して漢字を覚えているわけではありません。幼児たちの心には、「漢字を覚えなければならぬ。」などという気持ちはないのです。覚えようとも思わないのに、ひとりて覚えてしまった。幼児の記憶の仕方は、そのような「無努力の記

憶だということができません。
 努力して覚えるのではないから、少しも苦勞はありません。したがって、幼児の記憶の仕方は、「無負担の記憶」だということもできます。いや、それ以上に、「楽しんでする記憶」だ、というべきでしょう。

「関心」は記憶につながる

「記憶」の原理は、「関心」の一語に尽きると思います。記憶力の旺盛な幼児たちは、関心をもって見るものは、すべて記憶にとどめずにはおきません。

私は、子供たちに「漢字を覚えなさい。」とは言いませんでしたが、お話の間に、黒板に書きつけられる漢字に、関心がいだかれたので、子供たちはこれを覚えてしまったので

す。

ところで、子供たちは、漢字を覚えることによって何か失うものがあるでしょうか。「無努力」「無負担」で覚える子供たちは、漢字を覚えることによって失われるものは、何も

ないはずで。それは、昔、ただ海に注ぐのに任せ
 ていた川の水を、今、発電に利用していますが、電
 気を起こしたからといって、水は何も失うものがな
 いのと同じです。

電気を起こしたただ完全なプラスであるように、
 お話を聞きながら漢字を覚えることは、漢字を覚え
 ただけ、完全にプラスになるわけです。

この漢字教育によって失われるものが何もなく、



漢字を覚えただけプラス……しかし、ほんとうはそれだけのものではありません。

いわゆる「六領域」にわたる幼児の教育指導を、漢字で指導することによって、今まで以上の教育効果が各領域で得られる、そこに石井方式の価値があるのです。

「石井方式で漢字が覚えられたとしても、六領域にわたる幼児の活動が犠牲にされたのでは何もならない。」と言って、石井方式を非難する人がありますが、これは石井方式の実際を知らない、全一的のはずれた非難です。

子供たちにお話を聞かせるのに、ただ耳だけに訴えて聞かせるよりも、漢字を見せながら聞かせたほうが、ずっと子供の注意を集めることができることは、先刻の事実が何よりも証明していると思います。

私はそう言って、あとで述べるような、歌唱指導 や 絵画指導 の実例をあげて、園長先生に説明しました。そして、「石井方式・漢字教育」というものは、このように良いことづくめで、しかも指導する先生にも、指導を受ける子供たちにも、少しの負担もかからない学習法です。」と言って、この長い説明を結びました。

かくして、初め猛烈に反対していた園長さんは、幼児の実際の活動を通して、その真実の姿を自分の目で確かに見届けますと、一転して「漢字教育」の礼賛者となり、熱心な実践者となったのです。

是非を論ずる前にまず石井方式を食べてみてください

「幼児に漢字を教える。」と言えは、従来からの常識からして、とんでもない暴挙だと思ふのが、むしろ当然だと思えます。

私の主張は、長い実験に基づいて得られた結論であり、必ず世に入れられなければなら



ない真理ではありますが、すぐに今の世の人々が共鳴してくれようとは、初めから期待しておりませんでした。

どんな真理でもそれまで長い期間にわたって人々の頭を支配してきた考え方を変えるためには、常に、驚くほど長い年月がかかっているからです。

人間は、過去の『常識』という固定観念に縛られているため、新しい真理を真理と認めることは、なかなかできないものです。『常識』という色眼鏡を通して

見ますから、ほんとうの色がわからないのです。

その上に、人間というものは、自分で実験し、自分の目で確かめてみれば容易にわかる

ことでも、物ぐさで、なかなか実験しないものですから、食べてみようもしない人に、その食べ物の味を教えようとするようなもので、真理を理解させることの困難さは不可能に近いものがあります。

新しい食べ物の味を知ってもらうためには、どうしてもそれを実際に食べてもらう必要があります。食べてみさえすれば、ともかくも味がわかります。味の悪い悪いを言うことができません。

世の中には、食べてみもしないで、やれそれは味が悪いのなんのと、無責任に味を論ずる人が何と多いことでしょう。

私は、石井方式の良い悪いを論じてもらう前に、つまり、石井方式の味を論ずる前に、

『石井方式を食べてもらう』方法を考えました。それが、前述のような『幼児の実際指

導を見てもらう。ことだったので。

この効果はきめんでした。食わず嫌いも、一度味を知ったら一変するように、石井方式大反対の園長さんも、一転して礼賛者になり、石井方式の実践者になってくれました。昨年始めたばかりだというのに、わずか一年の間に、百余の幼稚園や保育園の支持を受けるまでに広まったのは、『幼児の実際指導』を見てもらい、その真実の姿を理解していただけたからです。

しかし、『幼児の漢字教室』を、初めて実施することのきっかけを作ってくれたのは、大阪市生野区の小路幼稚園長、井上文克先生です。ここに、井上先生のお書きになった文章により、その間の事情を、皆さんに紹介して、この序章を終わりたいと思います。

石井方式に拠る幼稚園教育

井上文克

私が初めて石井先生にお会ひしたのは、昨年暮、十二月二十二日のことである。従って、爾来、今日まで、まだ三ヶ月しか経ってゐない。にも拘らず、今ではもう百年の知己のやうな気持ちで、先生の御指導を受けてゐるのである。

大阪ではかなり知られた幼稚園として、『文化幼稚園』といふ名の幼稚園がある。この幼稚園の宮地武久先生が、ぜひ読むやうにと言つて貸してくれたのが、石井先生の『私の漢字教室』と『一年生でも新聞が読める』の両著であった。これを読み始めた私は、覚えす最後まで一気に読み通してしまった。

石井方式 漢字の教え方

読み終へると、すぐにも石井先生にお会ひせずにはゐられない気持ちに駆られて、早速、長距離電話で先生に会見を申込んだ。すると、いつでも会ふといふ御返事である。私は、

寸刻を惜しんで、直に伊丹の空港に車を走らせた。電話で会見を申し込んでから三時間後には、私は、石井先生のお宅で、先生と向ひ合って、親しく語り合ふことが出来たのである。それから更に、数日を置いて、今度は泊り込みで、十分に先生のお話を伺った。私は、先づ、先生の教育に対する情熱と信念の強さに打たれた。と同時に、先生の驚嘆すべき努力を以てしても、今の公立学校の実情から観て、所謂石井方式を公立学校に普及させることは今が限度で、これ以上は不可能に近いことを直観した。

石井方式の普及は幼稚園にこそ在るのではあるまいか。とりわけ、私立の幼稚園では、公立の小学校と違って、いやしくも子供たちの為になることであるならば、何処の誰にも気兼ねなく、自由に実施することが出来る。そして、もしも石井先生の御主張通り、漢字が幼児に適した文字であって、幼稚園在園中に、漢字がすらすらと読めるやうになるならば、その時には、小学校の教育も、勢ひ改めざるを得なくなるであらう。

さう考へた私は、その事を先生に率直に申上げた。先生は直に了解して下さい。そして、その後も懇談を重ね、年の改まった一月の二十日には、私の幼稚園において戴き、園児に討する実地指導と、石井方式の解説とを、願ひすることになったのである。

私は、先生の著述を拝見して、漢字が、幼児にとって少しも難しい文字ではないことを、知識としては十分に理解してゐたのであるが、さて現実に、目の前で、自分の幼稚園の子供たちが、相当に難しく思はれるやうな漢字を、平気で次から次へと読みこなして行くのを見せつけられると、まるで嘘のやうに、又、魔法でも見るやうな気持で、唯々驚嘆する思ひであった。先生は、お伽噺をしながら、その中に出て来る、登場人物や物の名前、主な言葉などを、園児たちの見守る中で、黒板に書き付けて行く。勿論、それは、子供たちが今までに見たことのない漢字である。その漢字は、その後、その言葉が重ねて使はれる度毎に、いつも先生の手によって指し示されるだけで、漢字についての格別の説明は全く

ない。かうして、物語が終る頃には、黒板は二、三十の漢字（その中には、昔、お爺さん、お婆さん、山、川、柿の木、赤い、大きい、実、女の子、都、風船、雨、鳥、などがあつた）で埋まったのである。

さて、お伽噺が終つて、先生が黒板の漢字を指きすと、もう園児たちは、それらの漢字を皆覚えてしまつてゐて、何のためらひもなく、元気な声で正しく読む。二、三十もの漢字を、どれも間違はずに読むのである。それは正に感動的な、実に驚嘆すべき光景であつた。

この光景は、この日、この会に招待されて出席した大阪市内の幼稚園長たちには、真に肝に銘ずる驚異であつたに違ひない。早速、「こんなにすばらしい教育は、直にも採用したい」といふ希望が、参会した園長たちの間に、期せずして起つたのである。

それで、「石井先生の実地指導を、私の幼稚園でもぜひ」といふ希望が、後から後からと私の所に殺到し、そのため、二月から三月にかけて、石井先生の休みなき指導行脚が続くことになつたのである。

お蔭で、二月末の現在、大阪市及びその附近で、合計一万余の園児を擁する四十余の幼稚園が、そろつて、この四月から石井方式を実施すべく、唯今準備中、……といふ所にまで発展したのである。

(以下略)

(国語問題協議会会報「国語国字」第四五号所載)